

---

## 大腿骨近位部骨折術後の地域連携クリティカルパスの活用について

武岡由樹、土井田稔、高瀬史明、大島隆司、飛田祐一、上本晴信、平中崇文、辻充男

(愛仁会高槻病院 整形外科)

---

### 【目的】

当院では 2006 年 7 月より大腿骨近位部骨折に対し地域連携クリティカルパス(以下連携パス)を使用している。連携パスではほとんどは急性期病院での治療後、回復期病院に転院してリハビリテーションを継続するが、その後のフォローが不十分になる可能性がある。本研究の目的は回復期病院退院後の状況を把握することである。

### 【方法】

当院で連携パスを適用した大腿骨近位部骨折症例のうち、2010 年 1 月から 12 月までに当院から回復期病院へ転院した 84 症例について回復期病院在院日数やその後の退院先などを調査した。

### 【結果】

84 症例の平均年齢は 84.4 歳、当院平均術後在院日数は 17.7 日であった。平成 23 年 1 月までに回復期病院を退院したのは 78 例であり、自宅退院例は 46 例で平均在院日数は 71.1 日、介護施設への退院例は 18 例で平均在院日数 65.7 日、急性期病院転院例は 9 例、療養型病院転院例は 4 例、死亡退院が 1 例あった。

### 【考察】

回復期病院からの退院先は自宅が最多であった。早期より回復期病院でリハビリテーションを行っているためと考えられる。またその際、地域の診療所との連携も必要である。一方急性期病院に転院した症例も少なくなかった。内科的疾患だけでなく、術後合併症や転倒による骨折など整形外科的問題によるものも見られるため、連携を密にして対策を取る必要がある。

### 【結論】

連携パスを活用し、診療情報の記録と共有を行うことにより、回復期病院と急性期病院、地域の診療所の連携をより強固なものにすることが必要である。